

村報いもがわ 昭和二十九年六月十日より

『五百川三十三ヶ所札所の由来』

佐竹 生

私は左沢までバスや徒歩で行くとき、藤田原（今は光風園の建った上手の松林の麓）に「待上人（たいじょうしようにん）入定の跡」の標木のあるのが気になってならなかった。

いったい待上人とはどんな僧であつたらうか、またどんな理由で標木まで立て後世に伝えなくてはならないのだろうか、私は種々手をつくして探っているうち、待上人こそ本村白倉騒動と言われる百姓一揆の後始末を身をもって引受け、藤田原で仕置き（生き埋め）を受けた傑僧であることを知った。

またこの百姓一揆と連なりをもつ五百川札所の由来も、待上人のことを調べてゆくうち知つたもので、古文書はあまり見当たらず主として口伝を参考にした。（筆者）

一、目くら回状

土用も近づいた七月だというに降り続く雨はもうかれこれ半月近く、寒さも加わり老人子供は綿子（綿入れ）を着る始末で、昨日からやっと晴れたと思つた空は、お昼近くまたどんより曇つて今にも大粒の雨がやって来そうだ。

稲は黒ずんで丈は伸びず害虫の発生さえ始まり五百川郷一帯は申すまでもなく柴橋村、左沢宿の一帯も冷害のため発育悪く不作が予想され

た。

特に五百川郷のうち、水口村、一石橋村、新崩村、須の瀬村、赤釜村、夏草村、船渡村の被害が甚だしく、朝日川より引き入れられている水口堰の灌水される場所は一雨降つて濁水が、流れ込むごと稲葉は赤くなり、細つていき、ついでこの間から、枯れ始めて来たのであつた。

水口村の長兵衛は畔に立つて放心したように、枯れていく田を眺めながらポツポツ降つてきた雨さえ気づかず立ちつくしているのだ。

「昨年一昨年も作はよくなかったが、稲が枯れはしなかった。誰かが神おろしでお告げを受けた。朝日権現様の祟りだと言つたことが本当だ。朝日川には魚さえ一匹も居なくなつたつちゅう話だ。いくら殿様だつて我々を見殺しにしてまで権現様の足元から、鉾山掘りしなくともよかんべ。この塩梅（あんばい）だと今年じゃあ一粒も家の田にやあ米ア成らねい。」

「こまったもんだな長兵衛どん」
いつ来たとも気づかずその声にギグツとして振り返る後ろに林蔵が立っていた。

「ウン困つたもんだお前んどの田はどうだ」
「やっぱり駄目だ。長兵衛どんのよりまだ悪いで、もうかかり口から三枚目まで稲は根こそぎ

枯れて失つた。」

「お前聞いたか、権現様の祟りを」

「聞いたども、俺ア殿様、うらめしいだ」

もうその頃暗さが近づく田んぼの中道を馬が五、六駄、首の鈴輪をチャリンチャリンと鳴らして上つていく。

「林蔵どん、あの馬の荷はみんな、鉾山衆に食わせる米だ、この村からなんどか集めた米も食い尽くして失い、庄内から上らせた米だろう」

「泣く子児と地頭にやあかなわないと云うがな。」

「俺たちだけじゃない、子も居る妻も居る、皆生きなくちゃあ」

あとは黙つて西の空を睨みつけるように立っている二人の顔に冷たい雨が打ちつけるようにまたひとしきり降り注いでくる。

長兵衛の胸には、若いだけみ惜しいような怒りがむらむらと沸きあがつて来るのがどうすることも出来なかった。（以下次号）

当協会では、昭和二十九年六月十日発行の村報いもがわに掲載された「五百川三十三ヶ所札所の由来」の続きを探しております。

当時の村報を保存されている方、また話の続きをご存知の方がいらつしやいましたら、エコールームまでご一報いただけましたら幸いです。